

二松學舎創立 130周年記念式典、 盛大に開催される

平成19年10月10日(水)、秋の清々しい空の下、大学九段校舎の中洲記念講堂で、文部科学省、私学関係団体、大学関係者他、約500人の来賓を迎え、二松學舎創立130周年記念式典が開催されました。

水戸英則常任理事の開式の辞で始まり、国歌斉唱、大山徳高理事長、今西幹一学長の式辞に続き、池坊保子文部科学副大臣、原田嘉中日本私立大学協会副会长、鳥居泰彦日本私立学校振興・共済事業団理事長からそれぞれ祝辞をいただきました。池坊副大臣の祝辞をご紹介します。



池坊保子 文部科学副大臣

さて来た西洋文化は、人々の心をあまりの多くの刺激で奪い、それが最も価値あるものであるように思われたのではないかと思います。その中にあって今まで「そアイデンティティ」という言葉が使われておりますが、日本の主体性、東洋の中にある日本の精神文化はどうなっていくのであろうか、その危惧を抱かれ、このような素晴らしい学舎をお創りになつた創立者に、私は深い感謝の思いでございます。

リンドウやオミナエシがさわやかな秋の風情を教えてくれます、この四季折節に移り変わる美しい日本の自然の中でも最も素晴らしい時に、こんなに多くの皆さま方のものとで、学校法人二松學舎創立130周年記念式典が挙行されること、心よりお喜び申上げます。

二松學舎は漢学者である明治の法曹界の重鎮でもあった三島中洲先生が、我が国が明治維新による西洋文化の摂取に汲々としていた明治10年、漢学塾二松學舎を創立したことに始まると伺っております。その当時、どつと押し寄

森鷗外の言葉に、「人間は一本の足で立なければならぬ。一本は西洋の足であり、一本は東洋の足である」という言葉がございます。どのような時にも、私達は世界の中の日本、そして東洋の中の日本、その良きものをしっかりと見据えていかなければならないと思います。以来130年の長きにわたり、我が国でも希有の歴史を誇る私立の教育機関として、着実に発展を遂げられ、現在では文学部と国際政治経済学部の二つの学部を二松學舎大学、ならびに二つの高等学校として、今日まで歴史

式典風景



鳥居泰彦 日本私立学校振興・共済事業団理事長



原田嘉中 日本私立大学協会副会长

「大丈夫でございます。二松學舎の130年受け継がれて来た、この建学の精神は、この現代にあつても人々の心に静かに浸透し、今この世界の中につけて何が大切かをきくと刻んでくれる」と私は申しあげたいと思います。

この間一貫して東洋の精神文化を基盤とし、知徳体の調和を重んじ、人間教育の実践に努められ、とりわけ国語や書道、中国語の各教科を担当する教員の養成においては多くの優れた教員を輩出し、全国の教育現場で活躍されております。

昨年、59年ぶりに教育基本法が改正されました。その中につけて、「我が国の伝統と文化を象徴し」、という言葉が入りました。130年のご努力が、今また現代だITだと言われている中につけても蘇つたということう、どうぞ二松學舎で学ばれた方、そしてお教えになった先生方、先輩の方々は誇りに思つていただきたいと思います。

この大学があるいは高等学校が今日このような発展を遂げられましたのは、今申し上げたような創立者の志を受け継いだ歴代の役員、教職員、そして先輩の方々のご努力以外、何物でもないと思います。とくに創立以来の伝統と実績のある国文学、中国文学における教育研究活動で、めざましい成果をあげられており、国漢の二松學舎と言われるようになります。とりわけ日本漢文学研究の分野では、世界トップクラスの研究教育拠点の形成を重点的に支援

続いて、名誉役員・名誉学位称号授与、学術文化奨励賞表彰があり、校歌を齊唱の後、渡辺和則副学長の閉式の辞で、満りなく終了しました。

また、当日、「漱石の通学路を歩く」というイベントを実施し、本学の卒業生である夏目漱石の実家に程近い早稲田駅から、二松學舎大学まで、漱石が當時歩いただらうと思われる路を徒歩でたどった附属高校の生徒有志も、この式典に参加しました。

記念式典終了後、同会場において、お茶の水女子大学藤原正彦教授による、「祖国とは国語」と題する記念講演が行われました。講演会終了後は、13階のファカルティ・ラウンジ、地下1階のレストランの会場で、記念祝賀会が賑やかに開かれました。



(右) 学術文化奨励賞の表彰



(中) 中洲記念講堂のエントランスには「二松學舎に学んだ人々」のパネルが展示された。



(左) 祝賀会に出席された台湾・中国文化大学理事長



夏目漱石の通学路をたどり、式典会場に到着した附属高校生徒有志たち。